

音を音楽に構成する能力を高める小学校音楽科学習指導の工夫

— 既習教材の旋律の特徴を比較する活動を通して —

呉市立仁方小学校 末永 深雪

研究の要約

本研究は、小学校音楽科の音楽づくりの領域における、音を音楽に構成する能力を高める指導の工夫について考察したものである。文献研究から、音を音楽に構成する能力を高めるためには、音楽の仕組みを生かし、つくる音楽の形やそれに至る方法を考えるなど、見通しをもってまとまりのある音楽をつくる指導の工夫が重要であることが分かった。そこで、ハ長調の旋律づくりの授業において、既習教材の旋律の特徴を比較する活動を取り入れ、音の高さの変化や始まる感じ、続く感じ、終わる感じ、反復など音楽の仕組みを意識する学習を行った。その結果、児童は、音のつながりや曲全体のまとまりを捉えることができるようになり、見通しをもって旋律をつくることができた。以上のことから、既習教材の旋律の特徴を比較する活動は、音を音楽に構成する能力を高めることに有効であることが明らかになった。

キーワード：旋律づくり

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年）音楽の第5学年及び第6学年の内容A表現の（3）指導事項イに「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること。」^①と示されている。

国立教育政策研究所における特定の課題に関する調査（小学校音楽）調査結果（平成22年）では、まとまりのある旋律づくりに関する問題において、まとまりがよい旋律であると考えた理由を、始まる感じ、続く感じ、終わる感じの三つの視点で記述できた児童は48.1%であった。この結果から、児童が音のつながりを意識しながら、曲全体のまとまりを捉えることに課題があるということが分かった。音を音楽に構成するために、音楽の仕組みを生かし、つくる音楽の形やそれに至る方法を考えるなど見通しをもってまとまりのある音楽をつくる指導の工夫が求められている。

そこで、本研究では、旋律づくりの学習において、曲全体のまとまりを捉るために、既習教材の旋律の特徴を比較する活動を行う。具体的には、旋律の音の高さの変化、旋律の反復や変化を聴き比べたり、楽譜で見比べたりする学習活動を行う。そうすることで、音を音楽に構成する能力を高めることができると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 音を音楽に構成する能力について

(1) 音と音楽について

中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）では、「音は、一音だけでも音楽となり得るが、基本的には、音と音との関係の中で意味をもち音楽となる。」^②と述べられている。属啓成（昭和55年）は、音と音楽について「言葉に文法があるように音楽にも一定の法則がある、形式がある。」と述べている。また、言葉について、「ソ」や「ラ」などの一つの発音では意味が生じにくいが、これをつなぎ合わせると「空」という言葉を連想することができるとしている。音楽もこれに似ていて、三つの音でも音楽的意味を感じると音楽の一つの小さな基本単位になるとし、この基本単位を言葉における一つの単語のようなものと例えている^③。

浦田健次郎（2012）は、一般的には、音楽を構成している一番小さな集まりは普通2小節で構成され、ある長さのグループにまとめられ、文章における句読点と同じような働きをしながら連結されるとしている。普通、4小節目には読点が、8小節目に句点が置かれることが多いとしている^④。標準音楽辞典では、8小節の形式について、形式として最も単純なものとして示されている^⑤。

以上のことから、本研究では、音は一つの音とし、一つの音をつなぎ合わせて2小節を構成し、2小節を基に8小節にまとめたものを音楽と整理する。

(2) 音を音楽に構成する能力について

「音を音楽に構成すること」について、小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）には、「音楽の仕組みを手掛けたりとして、いくつかの音を関連付けてまとまりのあるものにしていくことである。」³⁾と述べられている。高須一（2009）は、「音楽の仕組み」について、「音楽の仕組みは、音を音楽に構成するものであり、音楽の骨格といつてもよいでしょう。音楽を特徴づけている要素とかかわり合って音楽の構造をつくっているのです。」⁴⁾と述べている。これらのことから、音楽の仕組みと音楽を特徴づけている要素のかかわり合いから音楽の構造がつくられていることが分かる。音楽の仕組みについては、表1に示す。

表1 音楽を形づくっている要素⁽⁴⁾

音楽の仕組み	音楽を特徴づけている要素
・反復	・音色
・問い合わせ	・リズム
・変化	・速度
・音楽の縦と横の関係	・強弱
・始まり方、終わり方、クライマックス	・音の重なり、和声の響き
	・音階や調
	・拍の流れ、フレーズ

また、音を音楽へと構成する際の留意点として、津田正之（2011）は、「音楽の始め方や終わり方、つくる音楽全体の形を考えたりしながら、まとまりのある音楽をつくるようにすることが大切である。」⁵⁾と、音楽的な構成や全体の見通しを意識することの重要性を述べている。

本研究は、旋律づくりの学習を行うため、以上のことと踏まえ、音を音楽に構成する能力について次のように定義する。

- 一つの音をつなぎ合わせて2小節の旋律をつくり、音楽の始め方や終わり方など、つくる音楽全体の形を考え、見通しをもって8小節の旋律をつくる力。

2 既習教材の旋律の特徴を比較する活動

(1) 既習教材を用いることについて

三村真弓・河邊昭子ら（2010）は、小学校音楽科教科書のカリキュラムの特徴について「高学年では、教育内容が先行するのではなく、表現のための教材が中心となっているといえよう。音楽科授業に必要な音楽

リテラシーに関する、リズム感、音高感、音色の識別、音楽的語彙等は、第4学年までにある程度獲得されると考えられる。」⁶⁾としている。また、「第2・3・4学年の教育内容であったリズムや旋律の特徴を確実に把握することを繰り返しフィードバックしない限り、第5・6学年の教材の表現の工夫をすることはむずかしいであろう。」⁷⁾と述べている。このことから、高学年の音楽づくりを含む表現の学習においては、中学年までに学んだリズムや旋律の特徴について、再度振り返って学習を進めていくことが望ましいと考える。本研究では、第6学年を対象として授業を行うため、前学年までの教材曲を用いて学習を進めていくこととする。

(2) 音楽を形づくっている要素を比較する活動について

音楽を形づくっている要素を比較する活動の例をいくつか述べる。

伊藤雅美（2013）は、「歌唱」の授業の中で旋律の特徴に着目して教材曲を聴き比べたり、歌い比べたりする活動を行い、「それぞれの曲想の違いを比較することで、それぞれの曲の特徴を、より明確に気づくことができる。比較して歌うことで、それぞれの音楽のよさが際立つ。」⁸⁾と述べている。衛藤晶子・小島律子（2006）は、音楽づくりの指導において、複数の楽曲を聴き比べる活動を行っている。実践の結果、楽曲それぞれの多様な構成要素とイメージの関係を知覚・感受させることができたとし、「結果的に、子どもの創作作品には短いフレーズの繰り返し、音の高低、テクスチュアの漸増漸減など、5曲で知覚・感受したさまざまな構成要素の手法や技法が使われることとなった。」⁹⁾と述べている。なお、小学校学習指導要領では、「知覚」は「聴き取ること」、「感受」とは「感じ取ること」に相当する⁽⁵⁾。江田司（2011）は、音楽づくりにおいて、反復に着目しながら楽譜を見比べたり、歌い比べたりする活動を行っている。江田（2011）は、「『同音反復』が旋律を結び付け、なめらかな表情を生み出していることに気付かせた。」¹⁰⁾と述べている。

以上のことから、音楽を形づくっている要素を比較する活動を整理すると、「聴き比べる」「楽譜を見比べる」「歌って比べる」の三つの活動があると考える。また、これらの活動を行えば、次の二つのことが期待できると考える。

- 音楽を形づくっている要素に着目することで、曲想や曲の特徴により明確に気付かせることができる。

○ 知覚・感受した音楽を形づくっている要素を音楽づくりに生かすことができる。

(3) 既習教材の旋律の特徴を比較する活動について

音楽中辞典によると、旋律とは、「音の連続的な高低変化が、リズムと組み合わされ、あるまとまった音楽表現を生み出しているもの。」¹¹⁾と定義されている。中学校学習指導要領解説音楽編(平成20年)では、「異なる音高や音価などを連ねると旋律になる。」¹²⁾と述べられている。つまり、旋律の特徴は、音の高低変化(以下、音の高さの変化とする。)とリズムの組み合わせによって生み出されることが分かる。また、河邊昭子(2005)は、「音楽の構造を理解するための楽曲分析において、子どもがもっともわかりやすい音楽の要素は『旋律』である。」¹³⁾と述べている。津田正之(2012)は、「教師は、教材曲の音楽的なよさや面白さがどこにあるのか、それはどの要素の働きによって生み出されているのかを把握しておく必要がある。そしてそれらはどの子どもにも獲得させたい表現や鑑賞のポイントになる。」¹⁴⁾と述べている。

そこで、本研究では、教材曲の音楽の構造について最も分かりやすい要素である、旋律に着目して指導を行うこととする。また、既習教材を用いることで、より確実に旋律の特徴を把握させることができると期待する。なお、児童の既習経験を考慮し、音の高さの変化に焦点化して指導を行うこととする。

以上のことから、本研究では、既習教材の旋律の特徴に着目しながら、「聴き比べる」「楽譜を見比べる」「歌って比べる」の三つの比較する活動を行っていく。

(4) 既習教材の旋律の特徴を比較する活動を取り入れた授業の流れについて

齊藤百合子(2011)は、音楽を感じ取ることを質と表現し、「質の認識の発展過程」として音楽の学習過程について提案している⁽⁶⁾。

齊藤は、質の受容について、「質的に異なるものを置く、すなわち『比較聴取』は知覚・感受の両方を促すのに有効に働く。」¹⁵⁾と述べている。

また、質の識別について「音楽の流れを線や図で視覚的に示すことは、一目で音楽の形をとらえることができる。」¹⁶⁾と述べ、線や図はどちらかというと知覚したことの確認を促すとし、音で確認する場の設定を提案している。

そこで、齊藤が提案した音楽の学習過程をもとに、既習教材の旋律の特徴を比較する活動に視点を当てた一時間の学習の流れを表2に示す。

表2 既習教材の旋律の特徴を比較する活動に視点を当てた一時間の学習の流れ

学習の段階	認識	主な学習活動
既習教材の旋律の特徴を比較する活動	【質の受容】 ・楽譜など楽曲に関する情報は介さず、身体諸器官を使って、音楽を全体的存在として経験する。(聴く、歌う、演奏するなど)	聴き比べる ・2つの旋律について、旋律が醸し出している雰囲気の違いを聴き取る。 (元気な感じ、やさしい感じ等)
	【質の識別】 ・知覚・感受したことを外に出す。(言葉、絵、図など) ・気付きをクラスで共有する。 ・聴いたり歌ったりして、共有したことを確かめる。	歌い比べる 楽譜を見比べる ・階名を見ながら歌い比べる。 ・音符をつなげて旋律線を書き、その形から音の高さの変化の違いを確かめる。(ジグザグ、なだらかな山など) ・意見交流を通して、音と音がどのようにつながれているか音の高さに着目して気付きを整理する。 ・楽譜を見ながら旋律を聴き、旋律が醸し出している雰囲気と音の高さの変化を確認する。
旋律づくり	【質の表現】 ・知覚・感受したこと再構成して作品にする。	理解する ・鍵盤ハーモニカで音のつながりをいろいろと試しながら、音楽構成図に音の高さの変化を記入して、旋律をつくる。 生かす

「既習教材の旋律の特徴を比較する活動」では、児童が音の高さに着目できるように、速度、強弱などを一定にして単旋律で児童に提示する。また、既習教材を階名で歌ったり、旋律の形を楽譜で見ながら音で確かめたりすることを通して、音の高さの変化と旋律が醸し出す雰囲気を児童に意識させる。

また、「旋律づくり」では、「既習教材の旋律の特徴を比較する活動」における児童の感じ取りや気付きを生かせるように、リズムを限定して、音の高さの変化によって生み出される旋律の雰囲気を感じ取らせていく。また、始まる感じ、続く感じ、終わる感じにするための音の使い方だけでなく、山をどこにもってきたらよいかなどの発問をし、見通しをもって旋律づくりに取り組めるようにする。なお、音の高さの変化が視覚的に捉えられるように、音楽構成図を用いる。期待する児童の記述例とともに、第1時で使用するワークシートを次ページの図1に示す。

本研究では、各時における前半に既習教材の旋律の特徴を比較する活動を行い、後半に旋律づくりを行っていくものとする。このような学習の流れを繰り返して行い、スマールステップで音を音楽に構成する能力を積み上げていく。

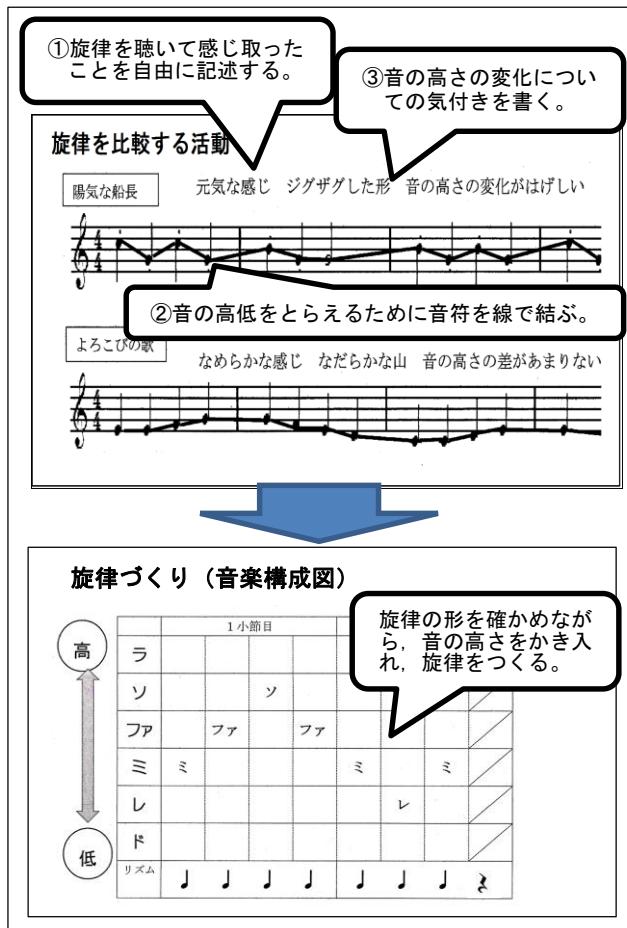


図1 第1時で使用するワークシート

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

旋律づくりの授業において、既習教材の旋律の特徴を比較する活動(以下、比較する活動とする。)を取り入れれば、音を音楽に構成する能力が高まるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表3に示す。

表3 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
視点1	音を音楽に構成する能力が高まったか。 ・一つの音をつなぎ合わせ2小節の旋律をつくり、始まる感じ、続く感じ、終わる感じなどを考え、見通しをもって8小節の旋律をつくることができたか。	ワークシート ビデオ観察 作品 事前・事後テスト 事前・事後アンケート 振り返りカード
視点2	既習教材の旋律の特徴を比較する活動を取り入れることは、音を音楽に構成する能力を高めることに有効であったか。	事後アンケート 振り返りカード 行動観察

(1) 児童の作品及び事前・事後テスト

表4は、児童がつくった作品及び事前・事後テストについての判断基準である。これらの正答の基準の内容は、既習の旋律の特徴を比較する活動で用いた楽曲に基づいて設定した。

表4 児童の作品及び事前・事後テストにおける判断基準

	正答の基準
始まる感じ	1小節目の4拍の音がCコード(ド・ミ・ソ)に当てはめて響きが適切である。(作品)
	1小節目の最初の音を主音(ド)で開始している。(テスト)
続く感じ	4小節目の最後の音が主音(ド)以外の音で終わっている。
終わる感じ	8小節目の最後の音が主音(ド)で終わっている。
反復	5・6小節目が1・2小節目の旋律を反復・変化して構成されている。(作品) 5・6小節目が1・2小節目の旋律を反復して構成されている。(テスト)

ア 児童の作品

児童がつくったハ長調、4分の4拍子、8小節の旋律について、表4に示す判断基準で検証した。

イ 事前・事後テスト

テストでは、ハ長調、4分の4拍子、8小節の旋律のうち、1小節目、4小節目、6小節目、8小節目に当てはまる旋律をカードから選んで完成させる問題を実施した。また、カードを選択した理由を記述するようにした。事後テストでは、事前テストと類似の問題とした。事前テストを図2に示す。

せんりつづくり プレテスト 6年組 氏名 ()
① 下の楽ふの①②③④に当てはまるカードをえらんで、まとまりのよいせんりつをつくりましょう。 5まいあるカードの中から4まいを使います。 何通りか当てはめて、音を出してたしかめてもかまいません。 せんりつができたら、カードをはりつけましょう。
① ②
③ ④
② 上のようにならべた理由を書きましょう。
カード

図2 事前テスト

(2) 事前・事後アンケート

音を音楽に構成することについての児童の意識を把握するために、4段階評定尺度法による事前・事後

アンケートを実施した。また、比較する活動が音楽をつくる活動に役立っているかについて、4段階評定尺度法による事後アンケートを行った。

IV 研究授業について

1 研究授業の内容と計画

- 期間 平成25年7月1日～平成25年7月4日
- 対象 所属校第6学年（2学級62人）
- 単元名 まとまりのある旋律をつくるう
- 目標

音のつながりや始まる感じ、続く感じ、終わる感じなどを考え、見通しをもってハ長調の旋律をつくることができる。

- 指導計画（全6時間）

時	学習内容（下線部は既習教材の旋律の特徴を比較する活動）
第一次	音のつながりを考え、2小節の旋律をつくる。
1	<ul style="list-style-type: none"> ○「陽気な船長」「よろこびの歌」の旋律の特徴を比較する。 ○ならかな感じの旋律のつくり方を知る。 ○音のつながりを試しながら、同音進行、順次進行で2小節の旋律をつくる。 ○つくった旋律を聴き合う。
2	<ul style="list-style-type: none"> ○「よろこびの歌」「友達はいいな」の旋律の特徴を比較する。 ○盛り上がる感じの旋律のつくり方を知る。 ○音のつながりを試しながら、跳躍進行を1回取り入れ、順次進行でつないで2小節の旋律をつくる。 ○つくった旋律を聴き合う。
第二次	始まる感じ、続く感じ、終わる感じ、反復を考えて、見通しをもってまとまりのある8小節の旋律をつくる。
3・4	<ul style="list-style-type: none"> ○「静かにねむれ」1～4小節目と5～8小節目の旋律の特徴を比較する。 ○旋律を反復させたらまとまりがよいことや、始まる感じ、続く感じ、終わる感じにするための旋律のつくり方を知る。 ○始まる感じ、続く感じ、終わる感じなど全体の形について、考えを試しながら、3人1グループで8小節の旋律（AA'）をつくる。 ○つくった旋律を聴き合う。
5・6	<ul style="list-style-type: none"> ○パソコンソフトで、自分の考えを試しながら、一人8小節の旋律（AA'）をつくる。 ○発展的学習として、8小節の旋律をつくることができた児童は、4小節の旋律（B）を加え、16小節（AA'BA'）の旋律をつくる。 ○つくった旋律を聴き合う。

2 教材選択について

ハ長調、4分の4拍子の既習教材の中から、比較する活動で使用する教材を次の二つの観点に基づいて選択した。

- ①順次進行や跳躍進行の特徴を捉えやすい。
- ②始まる感じ、続く感じ、終わる感じ、旋律の反復など音楽の構造を捉えやすい。

冒頭から8小節の旋律が上記の観点①②のいずれかに該当していることを条件に、16小節（二部形式）、32小節（三部形式）の曲も含めて教材を選択した。使用した教材については、表5に示す。

表5 比較する活動で使用した教材について

楽曲（作曲者）	楽曲の特徴	観点
よろこびの歌 (パートーベン 作曲)	同音進行や順次進行により、C（ド）からG（ソ）までの5音のみの音で構成され、なめらかな旋律を感じ取りやすい。	①
陽気な船長 (市川都志春 作曲)	A B Aの三部形式。前半8小節のA(a a')の部分を用いて、跳躍音程による歯切れのよい旋律を感じ取りやすい。	①
友だちはいいな (小山章三 作曲)	冒頭2小節が、順次進行から5度の跳躍音程が使われており、自然な高まりの旋律を感じ取りやすい。	①
静かにねむれ (フォスター 作曲)	AA'BA'の2部形式。前半8小節（AA'）は、始まる感じ、続く感じ（半終止）、終わる感じ（完全終止）を捉えやすい。	②

V 研究授業の分析と考察

1 音を音楽に構成する能力が高まったか

(1) 児童の作品による分析

図3は、第5・6時における児童の作品を表4の判断基準により分析した結果である。また、8小節の旋律をつくることができた児童は100%であった。児童はおおむね、始まる感じ、続く感じ、終わる感じを考え、反復・変化させてまとまりのある旋律をつくることができたと考える。

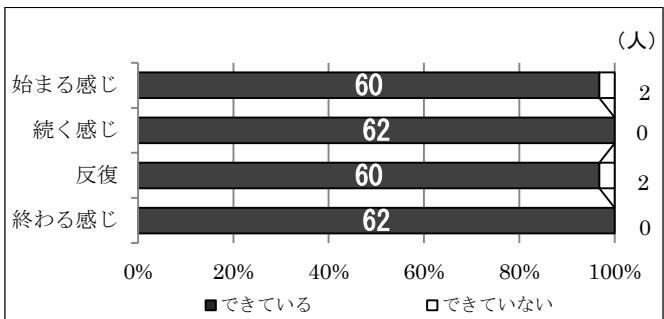


図3 旋律をつくることができた児童の人数

(2) 事前・事後テストによる分析

図4、図5は、音を音楽に構成する能力に関する事前テスト、事後テストの結果である。

すべての問題について正しくカードを選択できた児童は45.1%から87.0%に増加した。また、理由を答える記述の問題においても、4問または3問について妥当な回答をした児童が9.7%から83.9%に増加した。

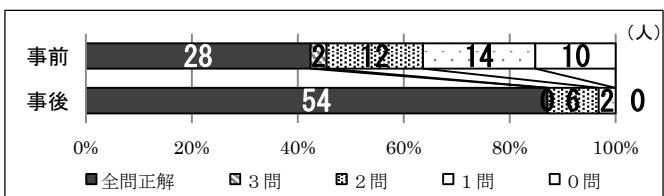


図4 正答数による児童の人数比較

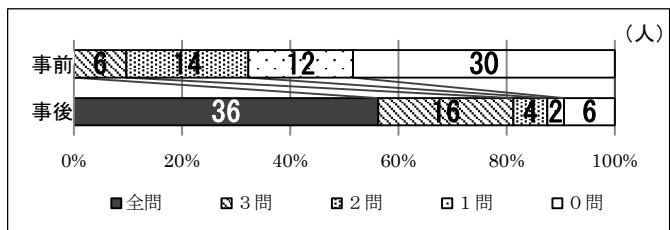


図5 理由を記述する問題において妥当な回答した児童の人数比較

次に児童aの検証を行う。児童aは、事前テストでカードを選んだ理由が妥当でなかった児童である。児童aが事前テスト、事後テストにおいて、続く感じにするためのカードを選んだ理由の比較を示す。

事前テスト	・②は直かんでCのカードをはりました。
事後テスト	・次にドレミレという音につながるよう、最後がミになっている音を②にはりました。

児童aの記述の比較

児童aは、事前テストでは漠然とした理由でカードを選択していたが、事後テストでは、続く感じにするために音のつながりを考えて答えてている。

以上のことから、既習教材の旋律の特徴を比較する活動を通して、始まる感じ、続く感じ、終わる感じにするための音の使い方を学習した結果、音楽全体の形を考え、見通しをもってまとまりのある旋律をつくることができるようになったと考える。

(3) 事前・事後アンケートによる分析

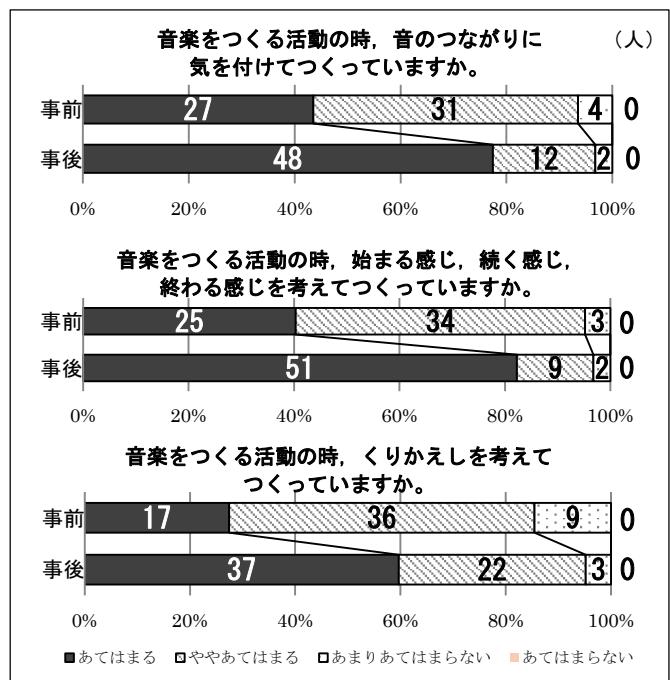


図6 音を音楽に構成することについての児童の意識の比較

児童が音楽をつくる時に、音を音楽に構成する能力が高まったかについて、事前・事後アンケートの結果の比較を図6に示す。三つの設問について「当てはまる」と肯定的な回答をした児童が増えた。このことから、音のつながりや旋律の反復、始まる感じ、続く感じ、終わる感じなど全体の形をはっきりと意識して音楽をつくるうとする児童が増えたことが分かる。

以上、児童の作品、事前・事後テスト、事前・事後アンケートの結果から、音を音楽に構成する能力が高まったといえる。

2 既習教材の旋律の特徴を比較する活動が有効であったか

(1) 授業の様子より

ア 第一次の授業による分析

第1時では、比較する活動を生かし、音のつながりを考えて2小節の旋律をつくることができた児童は全体の100%，第2時では90.3%であった。

第1時・第2時における比較する活動で出された児童の発言を表6に示す。

表6 比較する活動における児童の発言（第1・2時）

楽曲	感じ取ったこと	気付き
陽気な船長	・明るい・元気 ・はきはき	・線がジグザグ ・高かったり低かったり
よろこびの歌	・きれい・なめらか ・落ち着いた感じ	・線が波のよう ・高さがあまりかわらない
友だちはいいな	・明るい ・生き生き ・元気	・高い音がつかわれている ・山や谷がある ・音がはなれている所がある

第1時では、「高さがあまりかわらなかつたらなめらかな感じがする。」第2時では、「音を高くすると元気が出る音楽になる。」「ぐんと音が上がった後に、一つずつ音が下がっている。」などの児童の発言があり、音の高さの変化を全体で共有することができた。

次に、児童bを基に検証を行う。児童bは、事前テストのすべての問題について正しいカードを選択できず、理由を問う問題においても無回答であった児童である。児童bは、第1時と第2時の旋律づくりを終えた後、次のように記述している。

第1時	・音をとばさないでつなげていくと、きれいな音楽が完成することが分かった。
第2時	・音をジャンプすると元気な音になったので、ジャンプも少しまぜるといい音楽ができるということが分かった。 ※_____は感じ取ったこと（旋律の雰囲気），_____は気付き（音の高さの変化）

旋律づくりについての児童bの記述

旋律づくりについて、児童bの記述の中に「きれい

な感じ」「元気な感じ」など、比較する活動で共有した言葉が確認できる。これは、既習教材を用いて、感じ取ったことと気付いたことを全体で共有し、楽譜を見比べながら繰り返し聴き取ることで、音の高さの変化と旋律のもつ雰囲気を確実に把握できたからであると考える。

以上のことから、第一次では、比較する活動が、旋律づくりに生かされたと考える。

イ 第二次の授業による分析

第3・4時の3人1グループによる旋律づくりについて述べる。

第3・4時では、すべてのグループが比較する活動を生かし、音楽全体の形を考えて（表4の判断基準と同じで）8小節の旋律をつくることができた。比較する活動における児童の発言を下に、使用したワークシートを図7に示す。

静かにねむれの1段目と2段目を比較して

- 最後にドをつかうと終わる感じになるということが分かった。
- 始まる感じ、続く感じ、終わる感じを工夫するといい音楽となるということが分かった。

比較する活動における児童の発言（第3・4時）

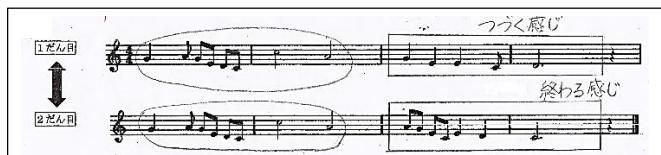


図7 使用したワークシート（第3・4時）

第3時では、3から4小節目と7から8小節目を繰り返して聴き比べさせたところ、「2段目は終わる感じになっています。」「ドの音で終わっています。」などの児童の発言があった。さらに、3から4小節目の旋律を任意の終わる感じの旋律に変えて聴かせることで、続く感じ、終わる感じの違いに気付かせ、全体で共有することができた。

次に、旋律づくりを行った際、どのような音楽をつくりたいかあらかじめグループで話し合わせてから取り組ませた。各グループの発言の例を示す。

- 山が真ん中に入るようにつくりました。
- 小さい山、大きい山をどこにするのかを話し合って工夫しました。
- 波のようにつくりました。続く感じと終わる感じのところを似ているようにつくりました。

旋律づくりについての発言（第3・4時）

グループの話し合いの中で、「山が真ん中に入るようにつくりたい。」「波のようにつくりたい。」などの言葉が確認できた。児童が見通しをもって旋律づくりに取り組んでいた様子が分かる。これは、既習教

材を用いて、始まる感じ、続く感じ、終わる感じなどの音の使い方を確実に把握できること、さらに、第一次において、音の高さの変化と旋律のもつ雰囲気を確実に把握できているため、長さが8小節に変わっても、山をどこにもつべきならよいかななど、音楽全体の形を考えてつくることができたと考える。

図8は、児童がつくった音楽構成図の例である。



図8 音楽構成図（第3・4時）

第5・6時のパソコンソフト⁽⁷⁾を使用した児童一人一人による旋律づくりについて述べる。

第5・6時では、表4の判断基準に基づき8小節の旋律をつくることができた児童は、96.7%であった。

次に、児童cの検証を行う。児童cは、事前テストで4問中2問正答の児童である。図9は、第5・6時に児童cがつくった作品である。



図9 児童cの作品より

児童cは、5・6時における旋律づくり後の振り返りで、「よろこびの歌のように同じ音を繰り返してつくりました。そうするとなんだらかな感じになってきれいになりました。」と記述していた。児童cの作品からも、同音進行、順次進行について工夫していることが読み取れる。児童cは3・4時のグループ活動における旋律づくりにおいても音楽全体の形を考えて旋律をつくっていたことから、既習教材を比較する活動を通して、旋律の特徴について理解を深め、音の高さの変化などを生かして旋律をつくることができたと考える。

(2) 事後アンケートより

比較する活動が、音を音楽に構成することに有効

に働いているかについて、4段階評定尺度法により事後アンケート行った。回答の結果を図10に示す。

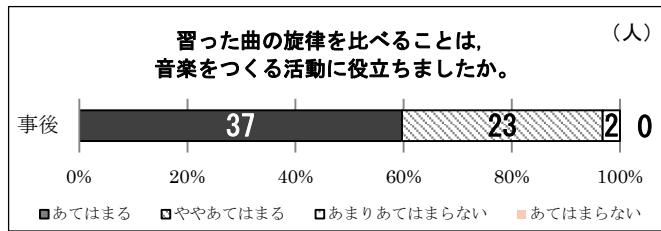


図10 既習教材の旋律を比較する活動が有効であったと感じた児童の人数

設問について、95.1%の児童が肯定的な回答を示し、比較する活動が音を音楽に構成することに有効であると感じたと捉えることができる。

以上、授業の様子と事後アンケートによる検証から、既習教材の旋律の特徴を比較する活動を取り入れることは、音を音楽に構成する力を高めることに有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

既習教材の旋律の特徴を比較する活動を取り入れることは、音を音楽に構成する能力を高めることに有効であることが明らかになった。

2 今後の課題

- 自分の思うイメージの旋律が十分にできなかつた児童もいる。今後、児童の実態に対応できるように、旋律の特徴を比較する活動で使用する際の教材選択の検討や学習展開の工夫をして、児童の思いを生かすことができるようにならう。
- 児童が感じたことや気付いたことを言葉で表現する力を低学年から積み上げておく必要がある。音を音楽に構成する際に、より多様な表現につなげていくために、感じ取りや気付きについての交流を活発にする指導の工夫が必要である。

【注】

- (1) 詳細は、属啓成(昭和55年) :『音楽形式の基礎』音楽の友社 p.1を参照されたい。
- (2) 詳細は、浦田健次郎(2012) :『新音楽総合講座4 楽式』一般財団法人ヤマハ音楽振興会 pp.6-15を参照されたい。
- (3) 詳細は、浅香淳(昭和62年) :『標準音楽辞典』音楽の友社 p.59を参照されたい。
- (4) 文部科学省(平成20年)『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.65に示された音楽を形づくっている要素に、

坪能由紀子・伊野義博(2008)『小学校学習指導要領&の解説と展開』教育出版 p.55で述べた「始まり方、終わり方、クライマックス」を加えている。

- (5) 詳細は、文部科学省(平成20年) :『小・中学校新学習指導要領Q&A』p.22を参照されたい。
- (6) 詳細は、齊藤百合子(2011) :『音楽的経験における意味生成を原理とした小学校音楽科授業構成の研究』風間書房 pp.275-335を参照されたい。
- (7) スズキ教育株式会社「キューブきつず3」を使用した。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成20年) :『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.60
- 2) 文部科学省(平成20年) :『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.19
- 3) 文部科学省(平成20年) :『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.60
- 4) 高須一(2009) :「新しい学習指導要領で求められている鑑賞教育とは」『鑑賞の授業づくりアイディア集 ～～その！音楽の仕組み』音楽之友社 p.10
- 5) 津田正之(2011) :「音楽づくりの授業の充実」『初等教育資料9月号』東洋館出版社 p.53
- 6) 三村真弓・河邊昭子・福田秀範・中村将之・青原栄子・大橋美代子・吉富功修・徳永崇・長澤希(2010) :「音楽リテラシー育成のための基礎研究(2)一小学校音楽科教科書のカリキュラムの検討を中心に―」『広島大学 学部・付属学校共同研究機構研究紀要 第38号』 p.148
- 7) 三村真弓・河邊昭子・福田秀範・中村将之・青原栄子・大橋美代子・吉富功修・徳永崇・長澤希(2010) :前掲書 p.148
- 8) 伊藤雅美(2013) :「ともに学び、高め合う授業づくり」『初等教育資料5月号』東洋館出版社 p.20
- 9) 衛藤晶子・小島律子(2006) :「音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取—表現の授業の場合—」『大阪教育大学紀要 第V部門 第54巻 第2号』 p.42
- 10) 江田司(2011) :「鑑賞と関連付けた音楽づくりの授業」『初等教育資料9月号』東洋館出版社 p.60
- 11) 海老澤 敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口 修(1999) :『音楽中辞典』音楽の友社 p.368
- 12) 文部科学省(平成20年) :『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.19
- 13) 河邊昭子(2005) :「学力の質的向上をめざす音楽科授業の構想」『学力の質的向上をめざす音楽科授業の創造』明治図書 p.39
- 14) 津田正之(2012) :「四つの視点から見た授業づくりのポイント」『初等教育資料6月号』東洋館出版社 p.40
- 15) 齊藤百合子(2011) :「音楽的経験における意味生成の基盤としての相互作用」『音楽的経験における意味生成を原理とした 小学校音楽科授業構成の研究』風間書房 p.293
- 16) 齊藤百合子(2011) :「音楽的経験における質の識別」前掲書 p.305